

平成22年 4 月 16 日現在

研究種目： 基盤研究(B)  
 研究期間： 2007 ～ 2010  
 課題番号： 19320067  
 研究課題名(和文)  
 現代日本語感動詞の実証的・理論的基盤構築のための調査研究  
 研究課題名(英文)  
 Investigation on Modern Japanese emotives for constructing basis of demonstrative and theoretical research.  
 研究代表者  
 友定 賢治 (TOMOSADA KENJI)  
 県立広島大学・保健福祉学部・教授  
 研究者番号： 80101632

研究代表者の専門分野： 日本語学・方言学

科研費の分科・細目： 言語学・日本語学

キーワード： ①感動詞 ②地理的・歴史的研究 ③文法的研究 ④会話分析的研究

⑤言語学的位置づけ

### 1. 研究計画の概要

現代日本語感動詞の実態を把握し、総合的分析によって言語学的性格を解明するために、次の3つの観点から総合的研究を行う。(a) **資料の収集と感動詞の地理的変異の解明**：方言区画にしたがった全国8地点での自然談話資料で「日本語感動詞音声データベース」を作成し、全国2000地点への通信調査によって地理的変異を解明する。(b) **文法論的・会話分析的解明**：個々の感動詞の文法論的分析によって、現代日本語感動詞の体系を明らかにし、会話における機能を明らかにする。(c) **感動詞の言語学的位置づけを明確にする**：感動詞の言語学的性格を明らかにし、どのような研究対象として存在しているのかを明確にし、言語学的位置づけを明らかにする

### 2. 研究の進捗状況

#### (1) 資料収集と感動詞の地理的変異の解明

現在までに、札幌・弘前・東京・名古屋・大阪・広島・松江・奄美・沖縄の合計7地点で、女性話者3～4人による自由談話資料を収集し、質問調査も弘前・広島・長崎・奄美・沖縄の合計5地点で行っている。現在その資料の整理中であるが、すでに、否定応答詞については、言語類型論的な観点からの分析が進んでおり、そのバリエーションのタイプから、種々の語形によって意味的なニュアンスを表現する「語彙型」、後ろに続く述部で表現する「単一型」、そしてその中間的な性格をもつ「中間型」の3類型になるのではといった成果が得られており、「単一型」は周辺地域に分布している可能性が高いとの、分布

についての仮説もできている。

#### (2) 文法論的・会話分析的解明

文法論的研究では、「いいえ」と「いいや」など否定応答詞の意味体系が明らかにされつつあり、肯定の応答についても、「うん」と「はい」「そう」を含む意味体系が明確になっている。フィラーについても、その用法や意味分析が進んでいる。また、認知的な観点からも考察が進んでおり、理解と発話産出の関係からの分析も進みつつある。

#### (3) 感動詞の言語学的位置の明確化

これは、最終的な結論になるものなので、まだ考察中であるが、副詞との関係や、感動詞の独立性、後続要素との関連性などから、従来、〈独立性〉が強調されてきた感動詞を、「立ち上げ詞」として捉えるという重要な視点が提示されており、どのように後続する要素と関連するかの実態把握等、その実証に向けて研究がされつつある。

### 3. 現在までの達成度

#### ②おおむね順調に進展している。

「研究計画の概要」に記した3つの大きな研究計画のうち、地理的変異については、大きな方言区画にしたがっての調査は終了した。文法論的・会話分析的な研究については、特定分野の感動詞の分析という段階である。言語学的位置づけについては、それを明らかにする重要な観点が浮き彫りになりつつある段階である。

#### 4. 今後の研究の推進方策

(1) 感動詞の地域性については、これまでの拠点調査に加えて、平成22年度は、全国2000

地点へのアンケート調査を実施する。それによって、はじめて感動詞の全国分布が明らかになる。

(2) 談話資料を、未収録地域(四国・北陸・九州等)で収録し、感動詞の使用実態を明らかにするデータベースを作成する。

(3) 会話資料の整備をすすめ、実際の会話でどのように感動詞が用いられるのかを明確にする。

(4) 中国語・英語話者の談話を収録し、ファイラー等の対照研究を行う。

(5) 上記の研究を踏まえて、感動詞の言語学的な位置づけについて、一定の結論を出す。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 友定賢治 感動詞の日中対照研究に向けて『日本のことばと文化』 溪水社 pp.354-363 2009 無
- ② 小林 隆・澤村美幸 言語的発想法の地域差と歴史『国語学研究』49pp. 1-14 2010 有
- ③ 小林 隆 談話表現の歴史『日本語表現学を学ぶ人のために』 pp.188-211 2009 無
- ④ 串田秀也 「理解の問題と発話産出の問題—理解チェック連鎖における「うん」と「そう」—」, 『日本語科学』, 第25号, pp. 43-66, 2009 有

[学会発表] (計 4 件)

- ① 定延利之 [招待講演] コミュニケーションと言語における「体験」, 日本認知科学会第26回大会, 2009年9月10日, 慶應義塾大学
- ② 定延利之 日本語音声コミュニケーションにおける信念変更を顕在化させる感動詞の義務性, 電子情報通信学会, 2009年5月15日, 沖縄産業支援センター
- ③ 友定賢治 日本語否定応答詞の構造と分布, 中国日語教学研究会, 2008年12月14日, 広東外語外貿大学
- ④ Shuya Kushida Confirming understanding and appreciating assistance: uses of nn-type and soo-type tokens in response to understanding check in Japanese conversation. , Poster presented at

11th International Pragmatics

Conference, 2009, Melbourne

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]